繪本
實録
曾我物語
全

綱島亀吉編輯

特60
275

特60-275
1200500930294

特60 275

東伊國の主

茲ハ大職冠鎌足ノ十代の孫伊東國宗佐久津美河津二ケ庄の領主久津美四郎大夫家継ハ四人のうちの兄と伊東大郎太夫祐家とを伊東武者

所祐継ハ弟の祐家家督を譲る

母の為ハ男を家督

百日ハ兵ゴ

武州大

藏金

帶刀先生

源の図

繪本實録曽我物語

島鮮堂梓

綱島亀吉編

大磯の虎
工藤祐經
朝比奈三郎
八幡三郎
近江ノ小藤太

工藤館對面之場
曽我十郎
曽我五郎
けむい坂少将

大磯の虎

朝比奈義秀曽我時宗両勇怪力之図

祐経と号し年かれけるが
祐親
家督
其由願ひけれども盛公の
依て祐経

義朝の領地を没収され
バ義朝怒り其子義平を命じ義賢を討
戦ひ敗を受
大かりと
命じ義賢を結
其折伊東祐
継ぎ義平の
手に従ひ義
賢が館に
迫り子金石丸は幼少
なれ兄祐家の子祐親
ふ家督を預け金石成長の
に渡せ遺言に逐ふ死せ
後保元の乱に義朝亡び平
家の世となり祐親も平家に
従ひ居る又祐継の子金石
に迫る成長及び工藤

▲家督相續をぎて繼母の為ふ家と弟ふうぢら色ことと推察ありて判決ありしのうさんを祐經いと口惜きことに伊豆国へ下向し三島在ふ

八幡の三郎近江の小藤太とふもの

名断

ふて祐經非分ふ陷入り祐親い上首尾ふて帰國しるゐ白と祐親が父祐家い嫡子なれい▲

☒こい旧臣ゆ〻ぢ行しふ両人ふろこひ厚くもてなしてことの次第を問ひけるふ祐經委細を物語り伯父祐親を討果さんと☆

☆おりば助力をこあむとい〻

☆ければ両人速りみ承

知方

祐経
我家ヲ
出て置密ヲ
伺ひる
伊東祐親ハ流人
頼朝をるこゝろん
と安元三年十月八日
九日の両日同国赤澤山
ヘ
お狩を催し
ける習ひ
ツヾキ

祐泰ゑう糸
進こうで
俣野を
投ゝう
狩
ゝ
ゝ
ゝ

ツヽキ　こゝれが件の矢を拔とりつゝ
近江八幡の印し在るべ祐經ぞの
まれゝふ相違なと疾討手と
むけゝる近江八幡の兩人ハ首尾
よく射留て我家へ帰る

〈あどの〉討手の
向ひしるべ
のがるゝところを
手いくつとひ迫る
今も討死迫る
滋ふ頼朝石橋山ふ
義兵を挙げ遂平家を
亡し源氏の代となり祐經
〈頼朝ふ仕へ祐親恐敵となり
栄枯所を変るまゝ祐經本領●津の妻
●安どく時め
きける河

曾我太郎
祐信と再縁
し河津が忘
れがたき箱王
の二人を召連て
工藤祐朝説
両人を申すが濱あり
死刑に行んとせしを畠山
重忠戦功ありて命
を免れる母の満江へ
大ひに歎く弟箱王
を箱根山へ
登せ行実
阿闍梨の

こゝ百
仇討のこと
忘るゝ事
なく十七
才の
春

箱根
へ下山して兄の許
へ来る兄一万元服
し曾我十郎
祐成
と言し
弟をつれて
北条時政
の邸へ至り弟
の身を頼に不
時政承知
しなし子と

徒弟と
なげ行ひ
あらしく

屋敷多く焼失して
おて大名の
宗と名のらせ
ける其後
建久二
年三
月四日
出火
各仮住居ありて
幸ひと兄弟ハ
工藤の仮屋を伺
ひ々るゝ祐經が郎等
八幡七郎がうんとゞめ賊る
りといへども兄弟ゐんぎゝ
及ぶべからず朝比奈三郎通り
合せ七郎をとらヒ兄弟をそ
らひ々るゝれば祐經まも
用心を固々るゝ工藤にころ
をゆるさせんと大磯の虎が許へ

ツヾキ

通ひくる工藤
いは容子をきく
をとこ心をやもんじ
くるさても建久三
年七月頼朝征夷
大将軍ふ任せられ
拜賀とて諸大
名鎌倉へ参勤
をゝ大小名参
集を幸ひ富
士のふもとにて巻
狩を催さん
と諸士の別
當和田義

⊗このゝひ御
狩へしゆ
張いと
こゝ就てい
両人へ帷子
一枚つ
ゝ
ゝるゝ
たゝと乞
れんば兄へむら
千鳥のゝもう
弟へ秋草ふ
蝶のもり
りのゝるを
あゝ兄弟

盛へ御沙汰
あり早速
手配ふ及
び用意と
のひ五月
二十日御
出馬と
觸出さる
兄弟へ之
を聞仇を
討ハ此さび
ふありとゝ
ゞひふ示し
合せ餘所

ゝるゞら
母へ今
生の暇乞を
ぜんと兄弟も
ろとも母が許へ
いゝり對面ゝ
⊗

受いゝぐき

ツギエ

ツヾキ
ゴ参詣
箱根権現へ
出立
謝して
下山して北條の手へ加わりて
狩場へ出張
田

別當
行実が面会して是迄の無礼
眼を色なす
行実が兄弟の
忠中を察し
義仲の奉納せし
末鹿丸の名剣を
十郎へ
義經が納めし
友切丸を
もとめられ兄弟へ其分情を
武蔵の国
富士野へ
御着陣
諸士八方へ馬を
馳せ先を争ひ
十四

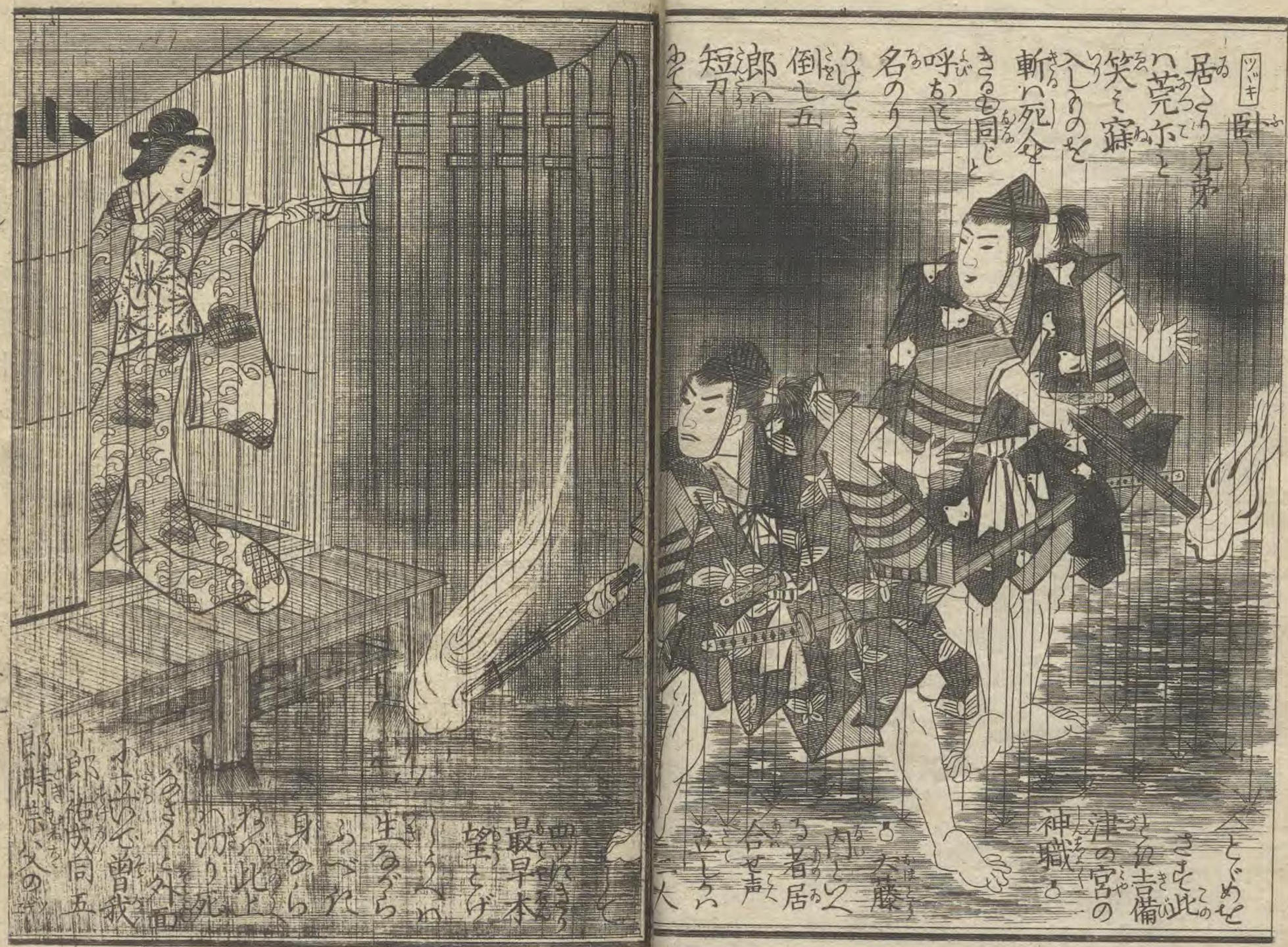
頼朝公富士の
裾野巻狩
之の
圖づ

△牛ゐ比ひき野猪近付者を射ふうけ荒ゐあれ〳〵御仮屋の

今日第一
突通し
猪と仕留
の功とぞ
記される
翌廿七廿八と
三日の間狩立
しが午の刻より
五月雨いとく
降れば狩
を止め一同
休息をし
けるさる
程ふ曽
我兄弟
今日の雨
十七

〈諸所の番兵をあざむきたくみよく通りぬけ漸く工藤の仮屋へいり内のやうすを伺ひし祐経いつくに兄弟とひそ顔をあはせかりくら畠山

郎等を持せ〻くこと共ふ曽我中村へ久しぶり今心やすしと夜ふけてまぎれもなき雨を簑笠ふ凌ぎ母ゟ賜つる惟子を着し狩衣小具足ふ身をくるめ〈の臣木多次郎夜まゐりのくめ通行しあるこの仮屋に指さてあれきたう兄弟をよろこび其方いりゐるふもとして祐経


ツッキ
居こう兄弟
い荒ぶると
笑ゑ窪
入しのを
斬い死全
きるも同じと
呼おと
名のり
ケけてきり
倒し五
郎い
短刀
とでめを
さて此
吉備
津の宮の
神職
六藤
内と又
る者居
合せ声
大

最早本
望とげ
生るぐら
ふびん
身をら
わが此上
ばかり死
ぐさんと外面
不孝の曽我
十郎祐成同五
郎時宗父の

ツヾキ
仇工藤
祐經を討取
そう我とも
うんものへ
来つく
勝負を
決せん
とよば
ひりれ
ば狩場
のさう
どう大
くるふ
夫豆狼藉者
弥三郎
岡部
甲郎

第番
馬

源三郎
香小二郎
加藤太
堀藤太
海野
太郎
宇田五郎
曰柿八郎
の十人兄
弟とうる詩
合わの
手きず
十郎は仁田
四郎が首を
五郎は逃る
御寮所
間近
丸が生
の五
を
芝の
頼も

を負て
引退そ〳〵
こゝを
十番切と
いつひふ

〈時宗を
打頼朝
これと
なれば
時宗
曰く
父を討
邑ちの
の心ふ
こらぶ
れい

工藤
の一子。
犬房丸
父を討
を無念に
ひ扇子を以て〈
打
ちゐ
おろ
願くは

我身を犬房丸
○下され渠グ
手にて死刑ホ
行るべきとし
しふ頼朝公ハム
自らセケ
条を
○糾問せらるゝ
ところ其ことへ
明白なりければ
君時宗ハ
孝心をん
しーゝる

大丈夫の壯士を失
るうんとと本意
なく思召れと
大法をおろせ
うへハ是非ホ
およバゞ又助命
の沙汰かあぶ
とも
生るゞ
らふべ
きりのるゞと

ツヾキ

遂ふ大房丸ふ引渡さる兄弟の
吊らひ料とて曽我の別所二百
余町母へらるゐつりくる又時宗い
松が崎ふて誅せらる祐成生
年廿二才五郎二十才なりとそ

△然るふ兄弟の一念
冨士野ふとゞまり
屢〻怪異をなす
くるゐぞ鎌倉と
きこゆ建久八年
九月廿八日一社をこ
て〻曽我両社
荒人神と崇め
まつらき冨士
郡の内小山
ゆ厨やるゐら
びふ仮宿郷を
寄附せらき
毎年五月廿八日

を祭日とゝ箱根
ふも同社を建〻
兄弟の髪太刀を
ゆつ〻神躰とそ
されば兄弟の孝士
祐の〻つゐと消さども
その名い後世まで〻も輝
やかれるこそ
めでゝ〻〻〻

御届明治十九年七月二日
日本橋區馬喰町二丁目十番地
編輯兼出版人　綱島亀吉
定價金五錢